

# Computex2019 & InnoVEX2019 レポート < 1 > Computex の変化と InnoVEX の急成長

Taipei Computer Association 東京事務所 駐日代表 吉村 章

今回から3回にわたって Computex2019 & InnoVEX2019 をレポートする。今回は Computex 概況及び台湾大手ベンダーの動向をレポート。次回は Computex2019 で注目を集めた製品や技術を重点的にレポート。そして第3回では注目の SmarTEX エリア、さらに2016年から Computex に併設されて今年で4回目の開催となるベンチャーイベント、InnoVEX（イノベックス）をレポート予定。Computex を切り口にシリーズで台湾 IT 産業の最新事情をレポートする。

## ■ 1 ■ 1,685 社、5,508 小間、5月31日（火） から会期5日間で開催

毎年6月上旬に開催される Computex2019 & InnoVEX2019 であるが、今年は2019年5月28日（火）から6月1日（土）まで、会期5日間で開催された。主催は Taipei Computer Association/TCA（台北市電腦商業同業公会）と Taiwan External Trade Development Council/TAITRA（台湾對外貿易發展協會）、2つ団体による共同主催。出展企業数は1,685社、5,508小間の出展規模。ASUS（華碩）、Benq（明碁）、Gigabyte（技嘉）、MSI（微星）、MiTAC（神達）、DELTA（台達）など台湾を代表する大手ベン



写真1 出展企業1,685社、出展ブースは5,508小間、写真は南港1ホール4F



写真2 海外からのバイヤー登録者数は海外171の国と地域から42,495人

ダーから、中堅・中小企業、スタートアップベンチャーまで幅広い出展企業を集めての開催。台湾のIT製品の買い付けを目的に海外から4万人を超えるバイヤーが集まるアジア最大のITイベントである。

## ■ 171の国と地域から42,495人のバイヤー登録者

総来場者数はおよそ11万人。この数は国内外の業界関係者なども含めた来場者総数である。昨年に比べると来場者総数は微減。しかし、主催者が注目しているのは来場者総数ではなく、海外からのバイヤー登録者数だ。

バイヤー登録者は171の国と地域から合計

42,495人。この数字は昨年に比べて0.5パーセント増。具体的な人数は発表されていないが地域別に見ると、中国、アメリカ、日本、韓国、香港が上位5つ。これにタイ、シンガポール、ドイツ、マレーシア、インドが続く。昨年まで中国からの来場者が減少傾向にあったが、ここに来て増加に転じている。一方で、タイやマレーシアなど東南アジア諸国からの来場者が昨年同様堅調に増えている。アメリカと日本からの来場者はそれぞれおよそ4千人。日本からの来場者は増加傾向。今年も日本人グループの姿を会場のあちらこちらで見かけた。



写真3 5/28(火)~6/1(土)まで会期5日間、写真は世界貿易センター第1ホールのInnoVEX会場



写真4 世界中から集まるバイヤーは視察や情報収集ではなく、製品の買い付け、具体的な商談が目的

## ■南港ホール2が3月に完成、Computexでは初めての運用

今年の3月に南港ホール2が完成し、Computexで使われるのは今年が初めて。南港ホール2の場所は南港ホール1の向かい側、道路を挟んだ位置にある。地下はMRTの駅で繋がっていて、雨の日は移動も便利。南港ホール2の展示面積は、1Fが15,120㎡、4Fのフロアが同じく15,120㎡で二層構造になっている。2Fと3Fに展示スペースはなく、5Fは会議室となっている。

これは南港ホール1と同じ構造だ。参考までに南港ホール1の1Fと4Fを合わせた面積は45,360㎡で、2つのホールを合わせると総展示面積は75,600㎡となり、幕張メッセ(1~11全ホール72,000㎡)を上回る展示面積となる。

南港ホールは台北市内の松山空港より車で25分ほど、桃園国際空港からは45~60分ほどの距離にある。台北駅からMRTを使えば南港展覽館駅までおよそ20分。世貿1館(世界貿易センター第1ホール)から南港ホールへMRTで移動するには乗り換えが必要となるのでご注意ください。Computex会期中は世貿1館と南港ホール1の間を無料シャトルバスが運行していて、渋滞がなければ15分程度で移動ができる。

これまでComputexのメイン会場だった世界貿易センターは1985年にオープンして以来、30年以上の年月が経つ。英語名はTaiwan World Trade Centerで通称TWTCと呼ばれている。中国語では「世貿1館」という呼び方が一般的だ。同じように国際会議センターの英語名はTaipei International Convention Centerで通称TICC、一般的に「会議中心」と呼ばれている。Computex2019ではTICCでもセミナーやカンファレンスが行われたほかIntel、AMD、Realtek(瑞昱半導体)など半導体ベンダーもここに展示している。実はTICCも注目すべきComputex会場のひとつだ。

世貿1館は Computex のメイン会場としてこれまで使用されてきた。2008年には南港ホール1が完成し、そして今年から南港ホール2の運用が始まった。Computexの主な出展企業は南港地区のホール1とホール2に移り、昨年まで世界貿易センターの別会場（第3ホール）で開催されていた InnoVEX が今年世貿1館に移ってきた。

世貿1館は今後大規模な改装が予定されている。エントランスホールの全面的な改修をはじめ、VIPルームやレセプションエリアを増設、会議室やセミナー会場の機能と質感を高め、飲食やコンビニなど来場者の利便性を考えた改装を行うなど、新しく生まれ変わる予定だ。2008年に運用が始まった南港ホール1の設備の拡充工事も同時に計画されている。これからも Computex はこの2つの地区での開催となり、Computex 会場は南港地区、InnoVEX 会場は世貿地区という形が定着しそうだ。



写真5 南港ホール1の面積は1Fが22,680㎡、4Fが22,680㎡で合計45,360㎡



写真6 新しく完成した南港ホール2、展示面積は1Fと4Fともに15,120㎡、合計30,240㎡

## ■2■ InnoVEX (イノベックス) とは・・・

2016年から Computex に併設されたスタートアップイベントが InnoVEX (イノベックス) だ。InnoVEX という名称は Innovation、Venture、Exhibition を組み合わせた造語で、3日間の会期中には、展示、セミナー、ピッチコンテスト、マッチングイベントが行われ、今年で4回目の開催となる。

5月29日(水)から5月31日(金)までの会期は Computex とは異なる。5月28日(火)からスタートする Computex に1日遅れての開幕となり、Computex より1日早く終了する。Computex が会期5日間であるのに対して InnoVEX の会期は3日間である。今年の InnoVEX では会場を世界貿易センター第3ホールから第1ホールに移し、世界25の国と地域から467組のスタートアップチームが参加。過去最高規模での開催となった。

会場の中央にはセンターステージが設けられ、ここではキーノートスピーチ、セミナー、パネルディスカッションなどが行われた。センターステージの座席数はおよそ300席、ピッチコンテストのファイナル(決戦大会)では立ち見が出るほどの来場者だった。

ピッチコンテストは143のエントリーから書類審査で31のスタートアップチームが選ばれた。セミファイナルはPiステージ(パイステージ)で行われ、参加31チームから10社がファイナリストとして決戦大会に勝ち残った。決戦大会は5月31日(金)午後に行われ、ファイナリスト10社による白熱したピッチが繰り広げられた。優勝賞金は10万米ドル、5月31日の決戦大会は InnoVEX2019 の中で最も注目を集めたイベントである。(InnoVEX2019 と台湾ベンチャー事情については本誌にて改めてレポートを予定)

Piステージとはセンターステージとは別に設けられた座席数100人ほどのステージで、ピッチ

コンテスト予選の他、フレンチテック、オランダ、カナダ、フィリピンなどが国別に出展企業のプレゼンを行った。また、ツーリズム・イノベーションテックなどテーマを絞り込んだピッチなどが行なわれ、こちらもセンターステージ同様たくさんの方が集まっていた。Pi (π) とは割り切れない数字、無限の可能性を示す。無限の可能性を秘めたスタートアップベンチャーが各社それぞれの技術やビジネスモデルを競い合った。

個人的にはセンターステージより Pi ステージのイベントのほうが面白かった。センターステージで行われたプレゼンほど洗練されたものではないが、ユニークな技術やキラリと光るビジネスモ



写真7 InnoVEX2019は世界貿易センターホール1に移しての開催、昨年より会場が広くなった



写真8 InnoVEX会場内のPiステージで行われたツーリズム・イノベーションのプレゼン

デルをプレゼンする企業もあり、来場者からも「センターステージ以上にPiステージのほうが刺激的だった」というコメントも聞かれた。今年のInnoVEXの隠れた見どころポイントだろう。

### ■ 3 ■ Computex の変化と InnoVEX の急成長をこう読み解く

Computex が大きく変化している。これまで台湾大手ベンダーは高性能のパソコンをリーズナブルな価格で大量に生産し、世界中に供給してきた。1990年代の後半以降、拡大させてきたビジネスモデルである。生産拠点を中国に移してから「世界のパソコン工場」としての地位は揺るぎないものだった。

しかし、情報端末としてのパソコンニーズの変化、追従する新興ベンダーとの競争、市場ニーズの多様化など、厳しいビジネス環境の変化が続いている。IoT がこうした動きに拍車をかけた。さまざまな分野で必要とされる端末やソリューションが多様化し、台湾大手ベンダーはソリューション分野へ大きく舵を切って製品開発を行うようになってきている。

繰り返しになるが、高性能のパソコンをリーズナブルな価格で大量に生産し、世界中に供給するビジネスモデルは過去のものになりつつあり、今はソリューションが主役である。筆者はこれを台湾大手ベンダーの「多角的全方位戦略」と名付けた。IoT、AI が時代のキーワードとなり、これまでの経験を活かしながら、新しい分野への挑戦を試みている。ユーザーのニーズをいち早く捉えて、スピーディな製品開発が求められるようになった。どんな分野がトレンドになるか、予測が難しい状況にある。

しかし、見通しがつかない状況であるからこそ台湾ベンダーはむしろ「強み」を発揮する。Try & Error で次々に新しいことに挑戦し、フレキシブルに戦略を変えていく。スピーディな意思決定、フレキシブルな対応、チャレンジスピリッツ



写真9 「多角的全方位戦略」の動きのひとつ Gigabyte の Smart agri(植物工場)

は台湾ベンダーの「強み」である。日本企業ではなかなか真似ができない動きだ。

## ■ Smart ○○○という言葉があちこちで飛び交う時代・・・

Computex のブースでは「Smart ○○○」というキャッチフレーズをよく見かけるようになった。中国語では「智慧○○○」と表現する AIoT の時代を象徴する言葉だ。台湾大手ベンダーがこの Smart ○○○へ大きく舵を切っている。Smart home、Smart office、Smart factoryをはじめ、Smart education、Smart vehicle、Smart medical、Smart health などなど。素材の分野では Smart cloth、物流は Smart retail、農業は Smart agri、サービスロボットは Smart robotics、他にも Smart hotel、Smart energy、Smart security、Smart eco-system、総称して Smart solution まで、良きにつけ悪きにつけ Smart ○○○のオンパレードだ。

ここ数年、展示会でさまざまな Smart solution を出展してくる台湾大手ベンダーだが、今年はこの動きにますます拍車がかかった。注目を集めた台湾大手ベンダーの出展を見てみると…。ASUS はホテルソリューションを出展。南港ホール1のパビリオンでは広いスペースを割いてホテ

ルソリューションの展示を行っていた。また Gigabyte の Smart agri(植物工場)、また、Benq の回転寿司システムなども目を引いた。Benq は今年もロボットアームの展示を行っていた。Smart factory のソリューションである。

MiTAC は今年も図書館システムを出展している。同時に実車を会場に持ち込み Smart vehicle 分野でも存在感を示していた。一方、MSI も Smart vehicle 分野の出展。この分野では年々バージョンアップを繰り返して毎年のように車載製品を出展している。さらに MSI では車載だけでなく他の分野にも出展範囲を広げている。今年、会場では MSI を含めて Smart retail 分野への進出が目立った。こうした動きも時代のトレンドだろう。

Acer は Computex 会場でパビリオン出展は行わず、会場外でのプライベートショウに切り替えている。信義地区の台北 101 エリアに特設パビリオンを設営し、エイサーのフラッグシップゲームマシンである Predator(プレデター)とハイスペック PC の新しいブランドである Concept-D の PR を行っていた。個人的には Computex に Acer がいないのは寂しい感じもするが、これも台湾大手ベンダーの戦略変更のひとつと言えるだろう。

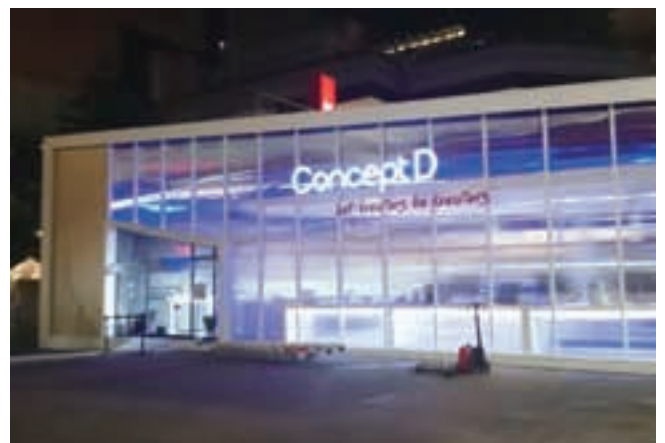


写真10 Acer は台北 101 エリアに特設パビリオンを設営、Predator (プレデター) と Concept-D をメインに

#### ■ 4 ■ スタートアップベンチャーのイノベーションに期待

台湾大手ベンダーが Computex で独自のソリューションを出展する動きに拍車がかかっている。年々分野を広げて製品ラインナップを増やし、より積極的に多角的全方位戦略に向かう動きだ。(後半の photo レポートでも詳しく紹介)

しかし、台湾大手ベンダーと言っても市場のニーズに応える技術革新をすべて自社で開発を行うには限界がある。自社でもさまざまな分野で IoT や AI の技術開発やイノベーションに取り組んでいるが、市場が求めているニーズは動きが早い。次にどんな分野で市場が立ち上がるか、予測は難しい。Smart ○○○という広範囲な分野で網を張り、市場のニーズをいち早く察知して、技術開発からプロトタイプを作り上げ、実証実験を経て小ロット生産、さらに量産に繋がるビジネスモデルを作り上げる。言葉にするのは簡単だが、これまでの実績と経験だけでは限界がある。

こうした賄いきれない技術やソリューションを台湾大手ベンダーはスタートアップベンチャーに期待している。スタートアップベンチャーの技術やソリューションをうまく自社開発の製品に取り組みんで、新しい製品を開発するベンダーも少なくない。またはスタートアップベンチャーに投資し、新しい分野への試金石とする動きもある。

2016年に始まった InnoVEX はそうした業界のニーズをうまく捉えた取り組みであり、InnoVEX は時代の要求に応えるイベントであると言えるだろう。単なるブームに乗るためのイベントではなく、大手ベンダーが技術やソリューションをうまく取り込む仕組みでもある。変化する時代の中で台湾ベンダーが業界での生き残りをかけた取り組みであるということもできる。台湾大手ベンダーの戦略の変化にうまくマッチした取り組みである。

こうした取り組みはスタートアップベンチャー

側から見ても都合がいい。自分たちが開発した技術やソリューションの受け皿を探しやすいという点だ。ユニコーン企業を目指すのではなく、技術やソリューションを直近のビジネスで活かすパートナーを探す企業が多いことも台湾スタートアップの特徴であると言える。

イノベーションを取り込もうとしているベンダー側も積極的にスタートアップを探している。ベンダーの周辺には VC やエンジェル、アクセラレーターやメンターがいる。スタートアップ側からするとプロトタイプの製作や実証実験の機会も探しやすい。こうした両者の利害が一致する環境が Computex と InnoVEX というイベントに新たな方向性をもたらしたといえるだろう。

台湾にはハードウェアベースのスタートアップが多いのはこうした背景がある。ソフトウェア系、Web系よりハードウェア関連のスタートアップが圧倒的に多いのが台湾の特徴。アプリケーション開発、ビジネスソリューション系、クラウドタイプではなく、ハードウェアの調達や供給を伴うソリューションが多い。この点も台湾の「強み」を活かした台湾独特なスタートアップ・エコシステム(新創生態系)と言えるだろう。



写真 11 InnoVEX は 2016 年から Computex に併設されたスタートアップイベント、写真はピッチコンテストの様子

## ■ 2018 年秋から TST (Taiwan Startup Terrace)、TTA (Taiwan Tech Arena) が本格稼働

従来、スタートアップベンチャーというと大学や地域自治体が運営をするインキュベーターが主たる役割を担ってきた。これまで台湾政府も人材育成や産業振興のために積極的にスタートアップ支援を行ってきた。しかし、箱モノ重視と揶揄された時代もあり、結果的に効果的なスタートアップ支援に予算が使われてきたかという疑問の声もある。

しかし、こうした動きに変化の兆しが見え始めたのは2015年である。これは台湾だけでなく中国をはじめアジア全体の動きにも合致している。同時にそれはIoTがビジネスのスタイルを変え始めた時期に一致する。台湾政府も従来のようなスタートアップ支援から方向転換を行っている。

2018年秋にはTST(Taiwan Startup Terrace)、TTA(Taiwan Tech Arena)という政府系のスタートアップ支援機関が本格的な活動を始め、台湾におけるスタートアップ・エコシステム(新創生態系)が軌道に乗りつつある。TSTとは台湾の経済部(日本の経済産業省にあたる機関)を中心としたスタートアップ支援のインキュベーターで林口に拠点を設け、運営は経済部中小企業処が主導的な役割を果たしている。

一方、TTAとは台湾の科技部(旧科学技術庁、現文科省にあたる機関)を中心としたスタートアップ支援のインキュベーターで台北市内の台北アリーナに拠点を設け、国内外のVCが入居するスタートアップ支援の最前線である。(それぞれの特徴と役割については改めてこの誌面でもレポートを予定しているのでご期待いただきたい)



写真12 InnoVEX2019では最も広い面積で存在感をしめしていたTST(Taiwan Startup Terrace)の出展エリア



写真13 TTA(Taiwan Tech Arena)もバビリオンを設置、国内外のVCが入居するスタートアップ支援機関

## ■ 5 ■ 多角的全方位戦略か、単なる戦略の迷走か…

市場のニーズに合わせていち早く求められているソリューションが提供できるか、これがポイントとなる。また、自社にそうしたソリューションを持ち合わせているか、スピーディかつフレキシブルに求められているソリューションの開発に取り組んでいけるか、機動力が勝負。台湾大手ベンダーは賄いきれない技術やソリューションをスタートアップベンチャーに期待し、スタートアップベンチャーの技術やソリューションをうまく取り込んで新しい分野の製品開発に挑戦する。2016

年に始まった InnoVEX はそうした業界のニーズをうまく捉えた。

しかし、模索を繰り返しながら、大手ベンダーと言えども展示会に持ち込む出展製品がなかなかビジネスに繋がらないというケースも少なくない。「多角的全方位戦略」という言葉はポジティブな響きがある。前向きである。しかし、方向性を誤ると結果が伴わず、費やした資金も人材も無駄になる。マーケティングが不十分であること、ターゲットの絞り込みが甘かったことがマイナスの結果をもたらす。

あれもこれも手を出して、結果的にビジネスの成功に繋がらないのは「戦略の迷走」である。積極的な「多角的全方位戦略」で攻めの姿勢を貫くことができるのか、人材や資金など限られた資源を有効に活用しきれず、単なる「戦略の迷走」で終わるのか、各社ともここ数年が正念場といったところだろう。

台湾ベンダーの「強み」は3つ。まず、高品質のパソコンをリーズナブルな価格で大量に生産し、世界中に供給してきたこれまでの実績。2つ目は世界中に持っている販売ネットワーク。そして、Try & Error を繰り返しながらも次々に新しい開発に挑戦していくスピードと柔軟性だ。

こうした「強み」を活かすことができる間に、AIoT のどの分野で独自の市場を切り開いていくことができるか、繰り返しになるがここ数年が正念場だ。これは日本企業(日本の中小企業)にとってはビジネスチャンスである。日本側の「強み」と台湾ベンダーの「強み」を組み合わせる協業できるポイントを見つけ出していくことができれば、大きなビジネスチャンスになるはずである。

TCA 東京事務所では InnoVEX2020 にてジャパンパビリオンを設置予定。(会期 2020/6/3-6/5)、海外での市場開拓または提携パートナー探しに取り組む企業を支援。また、AIoT をキーワードに「日台アライアンス」に関心がある自治

体、業界団体、または企業があればご連絡いただきたい。Computex2019 報告会やセミナーの開催、個別案件の相談も対応可能。2019年9月には台湾スタートアップ/現地視察も計画中。(「日台アライアンス」については、改めてこの誌面でレポートを執筆予定。ご期待いただきたい)

## ■ 6 ■ Computex に見る台湾大手ベンダーの多角的全方位戦略/photo レポート

時代は AI ソリューションへ大きく動き、Smart という言葉に代表されるようにさまざまな分野でビジネスソリューションの変革が起こっている。多角的全方位戦略なのか単なる戦略の迷走なのか、台湾ベンダー自身も模索を繰り返しながら進んでいるというところが正直なところだろう。戦略迷走の罠に陥らないためにもスピーディな意思決定とフレキシブルな対応が求められる。こうした台湾ベンダーとどう関わっていくべきか、日台それぞれの「強み」を活かすことができるアライアンスを考え、日本企業側もしっかり向き合っていきたい。

ここからは写真で大手ベンダーのブースの様子をご覧いただきたい。



写真 14 ASUS(華碩)はホテルソリューションを出展。ASUS(華碩)が開発したサービスロボット「Zenbo」を使ったデモを行っていた





写真 15 ASUS (華碩) の高性能ゲームマシン、欧米市場では e スポーツが人気、多角的全方位戦略の王道



写真 18 Benq (明碁) は回転寿司ソリューションを出展。これも多角的全方位戦略のひとつ (?)



写真 16 ASUS (華碩)、デザイナー、映像処理、建築事務所などビジネスユースのハイスペックモデル PRIME



写真 19 Benq (明碁) のアパレルショップ向けの Smart レジ。今年は各社からこうした Smart retail のソリューションの出展も多かった



写真 17 ASUS (華碩) のノートブックパソコンの最新モデル。もちろんこの分野の展示も欠かさない



写真 20 今年も Benq (明碁) ブースに同居して Qisda (佳世達) がロボットアームを出展。Smart Factory ソリューション



写真 21 ロボットアームで来場者の似顔絵を描くデモ。Benq (明基) ブースにて



写真 24 MiTAC(神達)は昨年に続き図書館システムを出展、写真は貸し出し/返却用の端末



写真 22 MiTAC(神達)は Mio ブランドで Smart vehicle 関連のソリューションを出展



写真 25 MiTAC (神達)、図書館システムが提案するトータルソリューションの全体像



写真 23 MiTAC(神達)ブース、実車をブースに持ち込んで力が入った展示を行っていた



写真 26 MSI(微星)の観光バス向け映像配信システム、MSI(微星)は早くから Smart vehicle 分野に取り組む企業



写真 27 MSI (微星) の Smart retail 向けソリューション、今年は Smart retail 分野の出展が多かった



写真 29 Gigabyte (技嘉) は AR/MR 分野にも出展スペースを割く、これも多角的全方位戦略 (?)



写真 28 南港ホール 2 で注目を集めていた Gigabyte (技嘉) の Smart agri (植物工場)



写真 30 Gigabyte (技嘉) が提案する Smart retail 向けソリューション、競争が激しい分野

次回は Computex2019 で注目を集めた製品や技術を重点にレポートする予定である。今回のレポートに関する内容のお問い合わせは TCA 東京

事務所まで、また台湾スタートアップ事情についてご質問にも対応可。お気軽にお問い合わせいただきたい。

TCA 東京事務所  
<http://www.tcatokyo.com>  
[bridge@asia-net.com](mailto:bridge@asia-net.com)